

## [経済同友会賞]

### 私、これに決めました!!



愛知県立安城農林高等学校 動物科学科2年 中山未宙

私の運命の出会い、3年前のことでした。当時、中学2年生の私は、授業で職業について調べていました。いろいろな職業がある中で、動物と一緒に毎日生活することのできる職業、酪農家に魅力を感じました。牛を見たこともなく、酪農家が日々どんな仕事をしているか知らないまま、私は酪農家を目指してみたくくなりました。

そのために、私は酪農について学ぶことができる安城農林高校に入学しました。実習で初めて牛に出会った時は、想像以上の体の大きさに驚き、この動物を飼育することを目指していたのかと、今更ながらに酪農を甘く見ていたなと感じたことを今でも思い出します。

実習や当番が本格的に始まり、鼻をつく牛の臭いに戸惑い、繊細な搾乳作業にも手間取り、私はこの仕事をこれからも続けていけるだろうか、不安を感じるようになっていました。

そんなくじけそうになっていた時、私は、牛担当の先生から、「子牛の哺乳をやってみたら?」とお誘いいただき、哺乳をすることで、酪農について新たな一面が見れるのでは?と思い、子牛の哺乳をすることにしました。そこで、1頭の新しい命と出会いました。その子牛はとても好奇心が強く、人懐っこくて、世話をする私にいつもすり寄ってきました。クリクリの瞳やフワフワな毛並み、じゃれて私の手をなめてくる仕草に、私は「やっぱり酪農家しかない!私は酪農家になるんだ!!」と、強く決意しました。

そして私は、酪農家になるために、牛のことを調べたり勉強を重ねました。牛は、体は大きいのに穏やかな性格で、実は臆病で警戒心が強いこと、また賢く、世話をしてくれる人の顔を覚えたりできることも知りました。そんな人間っぽいところもある牛に、ますます愛着がわきました。

運命はさらに、私の酪農家への夢をあと押ししてくれました。それは、学校での出前授業でした。愛知県酪農農業協同組合の皆さんから、実際の酪農の現場の話をお聞かせいただき、牧場見学へも誘っていただきました。「これはまたとないチャンスだ!!」と、私は喜び勇んで参加しました。

見学した牧場は、どれも学校より広い大規模の土地で、想像以上に多い牛が飼育されていて、圧倒されました。学校の実習では学べない数々の酪農作業について、私はたくさん学ぶことができました。その中でも、特に印象に残っていることが三つあります。

まず一つ目は、子牛の育成管理にITが活用されていたことです。子牛たちはICチップの入った首輪をしており、センサーにより、ミルクをいつ、どれだけ飲んだのか、飲ませてよいか、コンピューターで管理され、無人化されていました。

二つ目は、搾乳の自動ロボット化です。私たちはすべて手作業でやっていますが、牧場では、牛の学習能力を利用し、おいしい餌で搾乳ゲージへ入るよう誘導します。そして餌を食べている間に、ロボットが乳頭洗浄を行い、搾乳するミルクを

自動で装着し、搾乳していました。

三つ目は、牧場内に循環型の浄水設備が整備されていたことです。私も苦手な除糞作業時に、フラッシュバーンという作業で牛舎の上方から一斉に水を流し込み、水の力で糞尿を押し流して除糞作業の効率を上げる仕組みです。

これらの三つの技術は、私にはとても印象に残りました。そして最も勉強になったことは、牧場で働いているみなさんの牛への愛情、キラキラした笑顔、生き活きと作業する姿が見られたことです。「自分の好きなことを仕事にできるととても楽しいよ!」と私にアドバイスをしてくださり、私の酪農家への夢はまた一步、実現に近づきました。

今、私は、「酪農家として働く」ことを楽しめ、やりがいがあり、牛にたくさんの愛情が注げる、牛も人もとても仲の良い牧場に就職したいです。そしていつか、自分の牧場がもてる日が来たら…そんな日が来たら、見学で見たような牧場に負けない、素晴らしい牧場にしてみたいです。

私には考えがあります。私が作る牧場では、牛乳の消費を上げ利益率を上げるために、六次産業化にも挑戦したいです。私は自分の育てた乳牛を使って、健康志向のヨーグルトやプレミアムチーズ、人気のジェラートを開発してみたいです。また、日本の生乳の品質基準は高いので、需要の高まるアジアの国々へ向けて、ジャパンブランドを輸出して、世界の人たちに酪農を知ってもらいた

いです。

そして、私のように「酪農家になってみたい!」という後輩たちへ、私の牧場を開放して、体験酪農や生き物たちと触れ合える機会をつくり一緒に酪農をする仲間も増やしたいです。

私は酪農家になります! 授業外でも牛についての知識を増やし、牧場経営をするために必要な大型免許や農業簿記の勉強も続けます。

これからも知識を増やし、私はチャンスをつかみ、将来、牛と一緒に幸せな酪農生活が送れるように、私は夢を追い続けます。

